
エルフの嫁さん

吉（よし）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルフの嫁さん

【Nコード】

N5912R

【作者名】

吉^{よし}

【あらすじ】

バイク大好きフリーターの^{みやなかときひろ}宮中時広の元に異世界から現代に迷い込んできたエルフのお嬢様。

どんな物語になるかは作者もわかりません。

逆異世界トリップファンタジー！あるようで無かった、もしかしたらあるかもしれない事に挑戦してみます。

始めての作品なので生暖かく見守っててください。

タイトルが疑問系なのは適当だからです。

日常（前書き）

よろしくおねがいします。

日常

「^{みやなか}宮中君お疲れ様ー」

「あ、お疲れ様っす。」

タイムカードを押し終わると店長に話しかけられる。

このおっちゃん見た目は冴えないおっちゃんであるが、中身もぱっとしないおっちゃんなのである。

当たり障りが無さ過ぎるし、とくにこれといった特徴もなく詳細は適当にイメージして欲しい。

今の時間は5時ちょっと過ぎと言った所か、明け方のコンビニは人氣が全く無く、ガランとしていた。

俺のシフトは深夜から明け方までの4〜5時間である。

元々夜型人間であるしフリーターだったので時間の余裕はあった、むしろありまくった。

形式上はフリーターなのだが心は根っからのニートであり正直人生はもうすでに半ば諦めかけていた。

適当な短大を出たものの、時代は就職氷河期。とくにこれといった物が無かった俺は例に漏れなく現在絶賛就職活動中だ。

そんな普通を極めたような宮中時広事みやなかときひろ俺は適当にラーメンと飲み物の入ったコンビニ袋片手に家路に付いた。

バイト先から徒歩5分ほどで我が家に付く。

短大入学と共に上京してきたのは良かったのだが、いかんせん財布が寒く貧乏だった俺は良い場所に住めるはずもなく。この築60年、野差やさしやう荘の6畳一間、家賃1万2千円の超ボロアパートに住んでいる。冬は冷たく夏は暑い、とにかく立地も建てつけも最悪のアパートなのであった。

意味があるのかどうかすらない簡素な鍵を通すと玄関の扉を開ける。

そこには一人暮らし特有の大量のゴミと万年床で足の踏み場もない何時もと変わらぬ我が家の姿があった。

電気ケトルでお湯を沸かしてる最中にとりあえずテレビを付ける、世間では殺人や強盗など物騒なニュースは無くただただ政治家の足の引っ張り合いを写しているだけである。これは平和だな、と安堵すればいいのかそれとも日本の行く先を危惧すればいいのか…。

そんな事を考えている間に電気ケトルのお湯が沸く。

それをカップラーメンに注ぐとなんとも腹が減る匂いが部屋を包む。かじかんだ手を器に当てて手を温めているとそれは起こった。

出会い・・・？（前書き）

あらすじ

明け方バイトから帰ってきた時広だが
家に異変が・・・？

出会い・・・？

最初は何でもない家鳴りだった。

建てつけが悪い我が家ではトラックが通るたびに家鳴りするのだから慣れた物である。そして次は風。これも隙間風というより普通に風が通り抜けるのも良くある事である。しかしその風は段々と大きくなって行きまるで台風のように我が家で回り始める。慌てた俺は必死にカップラーメンをこぼすまいとしっかり握っていたが段々とそれが厳しくなるほど風が強くなっていき、ゴミが渦を巻いて部屋の中で狂喜乱舞していると中心部に集まって行く。

そしてそのゴミが一斉に弾かれたように周りにちらばった。

分厚い週刊誌が顔面に当たって痛かったがそんな事を気に留めていない場合ではない。その中心部がだんだんと光輝くと除々にそれが地面に落ちて行き、地面に付いたと思ったらまるで閃光手榴弾スタングレネードのように一際強い光を放ち、あまりの眩しさに手で目を隠す。

そして段々と眩しさが和らいで行く。ゆっくりと目を開けるとそこには信じられない光景があった。

「お、女の人……？」

ひきっぱなしの布団の上に女の人が静かに寝ていた。

明らかに日本人ではない大理石のような透き通った白い肌。

かなり手入れの行き届いていであろう美しい髪は銀髪で少し青みがかった。いた。

「青みがかってる……？」

人間的に不可能な髪色である、しかし今は髪染めでどんな色だろうと作れるためにそこまでおかしくないのかもしれない、いや、部屋に現れる時点で相当おかしいが。

「それに……、耳が尖っている……。」

そこが1番に目がついた。

人間離れた長く尖った耳。耳が尖った人なんて聞いた事無いぞ……？

恐る恐るその女性に近づいて行く時広。

「あ、あの……大丈夫ですか……？」

声をかけてみるが反応が無い、ぐっすり眠っているのであらうか。

しかし時広とていきなり部屋に現れた女性に話しを聞かない訳には行かないので、そつと

肩に手をかけてゆするうとすると、その女性が飛び起きた。

[illegible]

「すいませんすいません!!! ごめんなさいごめんなさい!!!」

尋常じゃない剣幕で時広の肩を掴んで激しく揺すりながら何語かわからない言葉を喋る彼女。

その剣幕に飲まれて訳もわからず誤り倒す時広。はたからみたらとんでもなくシュールであるが二人共真剣であった。

「;;li;gsdg;;gs;d..sa/. \!”#\$%&am
p;!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ごめんなさいごめんなさい日本語しかわからないですううう!!
!!!!!!!!!!」

尚もわからない言語で喋り続ける彼女に泣きそう、いや、すでに泣いてる時広はされるがままであった。

そこで彼女は一旦時広の肩から手を放すと神様に祈るような格好でしばらくブツブツとなにかを呟いているとその両手が徐々に光に包まれいていく。

そこは有り得ない光景なのだが、パニック状態の時広にはもう思考する頭は残っていなかった。

そして彼女がその光っている手で時広のおでこ自分のおでこに手を当てる。

一瞬ビクッとして後ずさった時広であるが、彼女がなにかしようにしているのを汲み取り、目をつぶって彼女の手がおでこに触るのを待った。

一瞬ひやっと彼女の手がおでこに触るのがわかったが、段々とそこが暖かくなってくる。

極弱いドライヤーを当てられているような感じと言えば1番しくりくるかもしれない。

そして彼女の手が離れると同時にその温かみは無くなり、少し名残惜しい時広だったが彼女がまた何か言いたそうにしていたので黙った。

「これで私の声が聞こえると思うのですが。」

「へ？ あ……え……？」

「私の言葉がまだわかりませんか？」

さきほどまで全くわからない言葉で喋っていた彼女が流暢な日本語で喋っているのに驚いたあまり素っ頓狂な声を上げてしまう時広。

「あ、き、聞こえてます聞こえてます！」

「良かった、失敗してしまったかと思いました。今の魔法を使った事で私の魔力は使い果たしてしまっただけ……。」

「魔力……？」

なに電波な事言っているんだこの女の人？ と一瞬思った時広だが先ほどの光景からもうなにも聞かまいと、時広は心の中で誓っていた。

「あー！！　こうしている場合ではありません！！　申し訳無いのですが此処は何処か教えていただきたいです。よろしいですか？　あ、私は決して怪しい者ありません。シュミザール森の深くにあるエルフの集落の皇女であるリサルフィーヌ・マルガナサツ・ウィンディーヌと申します。」

シュミザール森というのを聞いた事が無い時広であったが、外国にそんな場所があるのだろうかと思ふ。しかし今何処かを聞かれたので素直に答えようと時広が口を開く。

「えっと……、ここは日本の首都東京の千代田区って所だけど……。」

「ニホン……？　聞いた事ありませんね……、シュトトーキョー領のチヨダクなのですか？」

「え？　領って何？」

全く噛み合わない両者の会話。

このままではラチが明かないと思ったりリサルフィーヌは。

「申し訳ありません、今は火急で時が惜しいのです。領主館を教えてくださいませんか？」

「いや、領主館って何ですか？　てか日本を聞いた事が無いってどういう事です？　千代田区を聞いた事が無いならわかりますけど……。」

「ああ、もう！！　ラチが明きませんね！！　家の修理代は後で持

ってきますので失礼します!!」

そういうと玄関から出て行ったりサルフィヌ。

彼女はまだここが異世界だとは気付いていなかった。

戦い・・・？（前書き）

あらずじ

目が覚めたりサルフィーンであるが、

激しい剣幕で時広に詰め寄り押し問答

らちが明かぬとでていってしまうリサルフィーンであったが・・・？

戦い・・・？

玄関から今まきに出ようとしていたりサルフィーンであるが、その腕を時広は掴んで止めた。

「なんですか！！ 今本当に急いでいるんです！！ 手を離してください！！」

それはもう鬼のような表情で時広を睨むリサルフィーン。

すでに彼女のつかまれている方の手に魔力を纏わせている、もしここでこの男が下衆な行動に出たとしても彼女の魔力を纏った手ならすぐに大の大人一人消し飛ばすような魔法が発動できるだろう。

しかし、そんな事はつゆしらず時広は焦っていた。

今さっきのプチ台風の轟音とスタングレネードの光でほかのアパートの住人がなんだなんだと顔を出しているのである。

もしここで人間離れしている彼女が外に出たら大問題になるであろう。

どうにかして引き止めねば！ と思っていたらついつい彼女の腕を掴んでいた。

「いやちょっと待ってって！！ 今出て行かれますと非常に困るんだ

!!」

本当に心の底からの叫びであるが、彼女は彼女で今出て行かないと非常に困る事になって
いるのである。

両者とも最優先事項が正反対の事なので押し問答になるのは至極真つ当な事だった。

「あーもうっ！ ごめんなさい！！」

彼女の片手に纏わせていた魔力を魔法に変換する。

それは風属性の魔法「吹き荒れる風」エアープラストである。先ほど行った大の男が

消し飛ぶ魔法ほどではないが、軽く4〜5mは飛ぶであろうその魔法。

掌底に「吹き荒れる風」エアープラストを纏わせたまま時広に繰り出す。

そしてそれを食らった時広はそのまま風に打ち抜かれアパートの壁をぶちやぶり、隣のマンションの壁に勢い良く当たる。

——はずだった。

「ぐっ！」

時広は軽く触る様な弱さの掌底だったのにもかかわらず、けっこ
う本気のパンチを腹に食

らうような衝撃に訳もわからず打ちぬかれた。

しかし、そこは男の子。だいぶ痛いとはいえまだ立っていられる強さであった。

「つてえええええ。いきなり殴るなんてひどいな……！」

一瞬腹をかかえてうずくまった時広だったが、すぐに立ち上がりその痛さについて怒鳴ってしまう。

そしてその怒鳴った時広の目の前には……。

大きく目を開き驚きに固まっているリサルフィースがいた。

な、なんで私の「吹き荒れる風」エアープラストが効かないの！？

まさか対魔法障壁を展開……いや、それは無いわ。だって魔力が感じられなかったもの。

じゃあ単純に体だけで受け止めた、いやそれもありえないわ！！

これは例え2mの熊の

ような大男だって吹き飛ばしてしまうような魔法よ！？　こんな私

と大して身長が変わらな

いような男が受け止められる魔法じゃないわ！！　もしかしてなに

かしの魔道具で威力を

削いだ……？　って事はかなりまずい相手なんじゃ……。

そこまで考えたりサルフィーヌはもう一度時広に向かって魔法を放つ。

「くっ……！」 「荒れ狂う水」^{ウォータープラスト}「！！！！！」

この魔法は術者の手のひらから間欠泉のように水が敵に向かって行く魔術である。リサルフィーヌの家系は家名のウィンディーヌでわかる通り水の精霊に祝福を貰った家系である。

このウィンディーヌ家の者が放つ水属性魔法はとてつもない威力があり、この水属性^{ウォーター}下位攻撃魔法「荒れ狂う水」^{ラスト}を放ったとしても中級と同等かそれ以上の威力になるため、何の害意も無い人間に使うのをためらったが風が効かないとなると残りは火しかなく——リサルフィーヌが使える魔法は水・風・火——殺傷能力を持ってしまう。

そのためかなり魔力を抑えた状態でリサルフィーヌはその術を發動させた。

しかし魔力を抑えたと言え、ウィンディーヌの名は伊達ではない。その状態ですらこのアパート程度なら押し流してしまう水量と水圧を発動させる。

そしてそれを食らった時広は轟音と共に家財道具一式と仲良く川流れをするはめになる。

——はずだった。

しかしリサルフィーヌの手の平から出てきた水は蛇口にホースを付けて勢い良く出てるく
らいの威力しかなかった。

ジョボボボボボボボボボボボボボボボ。

二人とも啞然としてその光景を眺める。

時広は自分のズボンがびしゃびしゃになっているが、それすらも
気付かないように開いた
口がひらきっぱなしである。

「な、なんで……どうして……。」

リサルフィーヌが魔術の発動をやめると同時に「キュッ！」と
音が聞こえそうな感じで
水が止まる。

中々にシニールである。

「あなた……、もしかして魔力妨害結界をここに張っている!？」

「い、いや。張ってないけど……。」

「ど、どういう事なの!?!」

「どういう事なのって……こっちが聞きたいわ……、いきなり腹パ
ン食らわせたかと思った
らこんどは水攻めですか。」

「あなた「吹き荒れる風」エアーブラストと「荒れ狂う水」ウォーターブラストを知らないの!? 5大元素攻撃魔法の基礎中の基礎よ!」

なんとなく魔法名っぽい事は時広にもわかった。

そして水をかけられたかどうか分からないがここで一気に冷静になった時広はリサル
フィーヌの両肩に手を置く。

「ひっ……!」

自分の魔法がごとく打ち消され弱体され、自分では適わないと悟った——といっても勘違いしているだけだが——リサルフィーヌは肩を掴まれ戦慄が走った。

「落ち着いて聞いてくれ、今から俺の言う事は嘘偽りの無い言葉だ。」

あまりの恐怖に震えていたりサルフィーヌであったが、敵意の無いまっすぐな時広の目を見ると不思議とその恐怖感は段々と引いて行った。

そしてまるで「魅了」チャームがかかったようにその瞳に吸い込まれそうになったリサルフィーヌに時広は告げる。

「ここは多分……、君が居た世界とは違う世界だ。エルフも居ない魔法使いも居ない。そ

してシュミザール森なんてのも存在……しないとおもう多分。」

「な……どういう事ですか……？」

あまりの衝撃にリサルフィーナはただただ時広に聞き返してしま
う。

「きつとどっか違う次元から飛んできてしまったんだろう。日本っ
てのは国の名前だね、自
慢じゃ無いんだがとても有名で、ほんの少しでも学がある人なら誰
でもしってる国なんだ
よ。君はとてもじゃないが学が無いようには見えない。そんな君が
知らないなんてありえる
はずがない。」

見る見るリサルフィーナの顔が絶望に変わっていく。

「そして、これはこちらの世界の物語では良くある話しなのだが……
…、きつと帰る手立ては
無いはずだ。」

残酷な、しかし真実を聞いたりサルフィーナはその場にぺたりと
座り込んでしまう。

その顔は極無表情で、きつと今は脳が追いついて居ないのであろ
う。

「混乱しているところ申し訳ないんだけど、良かったら詳しく話し
を聞かせてくれないか
な？もしかしたら力になれるかもしれない。」

最後の言葉を聞いたリサルフィーンの顔に僅かな表情の変化が訪れたが、しかしまだ脳は全力演算中であろう。

そのまま少しまっているとようやく我に返ったのか、先ほどよりは悲惨な顔をしていなかったがその顔は暗く、今にも泣き出していまいそうに見えた。

そして、ゆっくりリサルフィーンが口をひらく。

戦い・・・？（後書き）

あと4～5話したらもう少し恋愛物っぽくなるはず、てかそうしたい……。

災害（前書き）

あらすじ

ここは異世界だと残酷な真実を言い告げられたリサルフィーンヌが重く口をひらく

その口から語られる異世界で起こった事情とは？

災害

「私が、いえ、私たちエルフ族が住んでいるのはシュミザール森の奥深く。滅多に人が来られないような場所でした。」

ゆつくりとリサルフィーヌが語りはじめる。

それを真剣な表情で聞く時広。もうすでに彼の中に異世界なんてありえない、などという考えは無かった。まるで友達の実家の話でも聞くようにリサルフィーヌの話を聞いた。

彼女の話 요약するとこうだ。

彼女たちエルフ族は基本的に人間と交流を持つ事は少なく、人と接しないよう大陸一の大森林シュミザール森の未開の地のさらに奥でひっそりと生活をしていたらしい。

彼女の家系は人間界で言う王家のような存在で、千人近く住んでいたエルフの里をまとめる家だったらしい。

とはいえ王と言うよりも町長と言った方がしっくりくるような規模なので、家も一般家庭に比べれば大きい方だったようだが、そこそこの家だったらしい。

エルフ族はいがみ合う事なく、みんな仲良く平等でとても平和だったそうだ。

しかしそこに悲劇が襲う。

シュミザール森は大陸一の大森林の名の通り、途方もないほど大きい森なのだそうだ。

一番エルフの里から近い人間が住んでいる町でも馬車や馬が通れるよう舗装はされているはずもなく、徒歩だと3ヶ月近くかかるらしい。

そして森の奥深くと言えば魔獣が出没するのである。

しかし、里には魔除けの柵や対魔獣設備が豊富に設置しておりここ600年は魔獣が里の中に入った事は一度も無いそうだ。

さらに言うのであれば、その近くに出没する魔獣の名前を聞いた人間は裸足で逃げ出すような強力な魔獣だと言うのだからそれほど里の防御が強固であったのだろう。

そしてそのおかげか、平和ボケしていた里の人々は気付かなかったそうだ。

最強最悪の魔獣の姿に。

その魔獣の名前は「喰い足りぬ亡霊団」
イートゥ・スパルトイン

何千年と生きた強大な「邪竜」^{デス・ドラゴン}の牙から生まれたとされる骸骨の集団である。

ただでさえ膨大な魔力を誇る竜が何千年と生き、生ける伝説となつた末死んだ後のその身にはそれはもう天文学的な量の魔力がそなわるそうだと。

血を浴びたら不老不死、鱗で鎧を作れば傷一つかぬ最強の鎧、爪や牙で剣を作ればなんでも一刀の元に切り伏せる最強の剣。

しかし、「邪竜」^{デス・ドラゴン}はその天文学的な量の魔力と共に、とてつもない邪悪を生み出すとされている。

台風であつたり地震であつたり津波であつたり。

「邪竜」^{デス・ドラゴン}は名前だけ聞くと邪悪な竜であり、人類に敵なすものと見られそうだがそれは違う。

彼らは地に降り注ぐであろう不幸をその身に宿し、災いを防いでくれる言わばお地蔵様のような存在なのだ。

知性が高い彼らは子孫に死の間際に封印してもらい、少しずつ災いを放出させ浄化した末に燃やされ灰になる。

現代風に言うならば核燃料のような物であろう。

しかし一万年ほど前になんらかの理由で「邪竜」デス・ドラゴンの封印がされずに

そのまま災いを放出してしまった事があった。

そのときまだ人は生きていなかったといわれるが、大陸は割れ、山という山は噴火し、津波によって全ての大地は更地と化しそれはまるで地獄のようだったと言われている。

そしてそのときに落ちた牙、それによって「喰い足りぬ亡霊団（イートゥ・スパルトイン）」が生まれたとされる。

その身は壊される事なく、スケルトンに効く神聖魔法すらきかず、膨大な魔力を身に宿し、動く姿はまさに災害。

300年に一度の禍々年まがまがどしに現れるとされ、その強さは特S級。対処方法

は発生されたとされる「邪竜」デス・ドラゴンの牙を壊す事だけだがその牙はきつと海

底深くに眠っているだろうため実質決して勝つ事のできない怪物。モンスター

通った道には草木は残らず焼け野原。

大昔に伝説の勇者が立ち向かったとされるが一体一体の強さは強力ではあるがさばけぬ事は無い強さではある。

しかし不滅の体に1000に届く大群。そして大将と呼ばれる10m級のボスの前では全ての者が塵になる。

まさに最凶最悪の怪物^{モンスター}なのだ。

そんな怪物^{モンスター}に里は襲われた。いや、通過したと行ったほうが正確である。
う。

その日でエルフの里は地図から消えた。

里の中は阿吽絶叫^{モンスター}。怪物に敵うはずもなく瞬く間に殺されていく。
そして

殺された物は骸骨になり軍に入って行く。

まさに「喰い足りぬ亡霊団^{イトウ・スパルトイン}」

対魔物の防御障壁や破魔の矢、そして魔物が嫌う聖水ですら効果が出ない。

逃げ惑う者は殺され、あまりの恐怖に足がすくんで動かない物も殺され、女子供老人も殺されとにかく殺された。

そこには破壊と絶対の死しか無かった。

そしてそんな襲撃を受けている時、リサルフィーヌはウィンディヌ家の地下に隠れてい

だが、もうまもなく亡霊たちは自分たちを見つけて殺すであろう事はわかっていた。

父と長男は果敢に戦うも無残に戦死。気が強くみんなに尊敬されていた姉は住民を避難させる最中に死亡。母はすでに病で他界している。

残るは長老たる祖父とリサルフィーヌだけとなった。

しかしなぜカリサルフィーヌは牢屋の中に入れられていた。祖父が閉じ込めたのである。

理由は至って簡単、彼女を逃がすため。

病弱な彼女は家から出ずに地下室へと避難した。

そして祖父に言われるがまま牢屋に入った所で鍵をしめられた。

最初は訳もわからず呆然としていたが、祖父がしようとしている事に気が付いた彼女は必死で叫ぶ。

そう、長老は転移の術を使おうとしていた。

別に命と引き換えに使うような術ではないのは確かである、ただし膨大な魔力を使う事にはなるが。

しかし一番の問題は詠唱の長さである。

リサルフィーヌの居た世界では無詠唱魔法が基本の魔法であり、詠唱有りの魔法はそれに魔力を上乗せするための魔法である。

故に大きな魔法になればなるほど詠唱は長くなる。

彼女たちの避難場所には刻一刻と亡霊たちが迫ってきている。そして祖父は詠唱魔法を使おうとしている。

そして魔力を行使するためには集中力が必要なので動きながらの詠唱などはまず不可能。

故に祖父は自分を閉じ込め、反対されるとわかっていながらその長い長い詠唱魔法を使ううとしているのだ。もちろんそんな大魔術を使った後に魔力は残るはずがない。祖父はきつと死ぬ気なのであろう。

リサルフィーヌは何度も祖父に止めてくれと頼んだが、その願いは聞き入れられなかった。

長い詠唱、10分ほどだろうか。

ついに亡霊が降りてきた。

とてつもない嫌悪感にその場で吐いてしまうリサルフィーヌ。

全身が災いでできているあの骸骨は見ただけでそれはもう信じら

れないような恐怖と嫌悪
感が襲うのである。

祖父の詠唱もあと数秒というところまで完成されていた。

必死に叫ぶりサルフィーヌであったがその声は決して聞き入れ
る事はなかった。

そして術が完成し、空中に浮かぶ魔法陣に魔力が流しこまれる、
が。

あとほんの少しの所で祖父の胸に剣が突き立てられる。

「リサルフィーヌよ……、我が孫よ……。せめて生き残って――」

そこまで言った祖父の首が飛ぶ。

そこで気を失い、目が覚めたらここに居た、というわけだ。

災害（後書き）

ぜんぜん要約されてませんね。
書いてたからおもしろくなっちゃって。

混乱？（前書き）

あらすじ

リサルフィーヌの居た世界の話を聞いていた時広だったがそれは想像を絶する過酷な話であった。そして話終わったリサルフィーヌは？

混乱？

そして話し終わったりサルフィーヌは俯いてしまった。

こんな暗い話をした後だったら仕方ないか……、と思っていたが……。

「……………うっ……………ひぐっ……………ぐすっ……………」

泣き出してしまった。

うわーどうしようどうしよう！！

今までまともに付き合った女性なんて数えるほどしか居ない時広は焦った。

こういう時にどうすれば良いかわからないのである。

どうしようどうしよう。

もう彼の頭の中はそれだけでいっぱいだった。

俺が帰れないって言っちゃったのがまずかったのかな……、どうしようー！

泣いてるエルフに慌てるニート。

はたからみたらそれはそれはもう酷い有様だった。

こういう時は頭撫でてあげたりとか抱きしめてあげたりとかしてあげた方が良いんだろう
けど見ず知らずの男にそんなことされたら嫌なだけだよな……。

泣いてる彼女を尻目に、時広はただ呆然としていた。

30分ほど経ったであろうか、ようやく彼女も落ち着いてきたのかもう鼻をすする音しか聞こえない。

時広はすつとティッシュを差し出す。

「あー、これは鼻かんだりよごれた物拭くための使い捨てのハンカチみたいなものだから使って。」

「あ……ぐすつ……ありがとうございます……ずびっ。」

シュッとティッシュを取るとまたおんなじようにティッシュが出てきてびっくりしていた
が、とりあえず鼻をかんでいた。

「それと……、まあ温かい物でも飲んで落ち着いて。」

安物のティーバックに入ったアップルティーを彼女に渡す。

「すみません……。頂ます……。」

なんてことない100円のマグカップをまじまじと見て「綺麗……。」だとか言っているが、きっとそれが文明の違いと言う物なのだろう。

「すごく香りが良い紅茶ですね……。色もすごく綺麗……。」

まあそれは合成着色料に香料の塊なんだけどね。

やはり味が微妙だったのか、少し頭を傾げていたがまた飲んでいった。

きっと彼女には香りと色付きのほんのり甘いお湯に感じたであろう。

しばらく紅茶を啜る音だけが響いていたが、彼女が飲み終わったのか話しかけてきた。

「見苦しい所をお見せしてしまいました……。」

「いや、当たり前前の反応だと思うよ……。」

その後に「家族が死んだって言うんだったら」と付け加えようとしたがまた場が重くなっ

たり彼女が泣きだしてしまったりしたら目も当てられないので黙っておいた。

もし自分がいきなり家族を皆殺しにされて見覚えの無い場所で目が覚めたら発狂していたであろう。

なのにもかかわらず彼女は冷静に行動していた。

それだけでも大変すごいことである。

「落ち着いた？」

「はい……。」

「なら良かった……、それでさっきの話聞いてて思った疑問なんだけど聞いて良い？」

「私に答えられる範囲でしたらお答えします。」

「うん、まず一番聞きたい事は自分で転移魔法使って帰れないの？」

転移魔法で来たのであれば転移魔法で帰れるんじゃないか？と時広は思った。

「多分それは無理かと思います……、転移魔法というのは人二人分の魔力を使うのですよ。」

「二人がかりで魔術を行わないといけないほど莫大な魔力を使うん

だ？」

「いえ、術者は一人で良いんです。しかし転移される側も転移中にダメージを受けない用に魔力を引き出されるのです。なので転移の術は他人を転移させるため、逃走用として使われます。」

「なるほど、術者は自分の魔力ほぼ使って転移させるから術を受けた方は自分で結界を張らなきゃいけないと。」

「自分で張るのではなく、転移の術に転移者の魔力を引き出して防御膜を張ると言う術が組み込まれているのです。」

「ふむ……、ってことは魔力が無い人は転移者になれないの？」

「そうですね……、そうなのですが、私の居た世界では魔術を使えないという人は逆に少なかったです。量は異なりますがほとんどの人は魔力を体に宿していました。」

「へー、そうなんだ。」

「はい。そのために自分に転移を駆ける事は転移の術を使っても尚余りある魔力が無いと不可能なのです。私の祖父は魔力量がエルフの中でも多い方でしたがその祖父でも自分に転移をかける事は不可能だと言っていました。」

エルフはただでさえ人並み外れて魔力が多いはず、そして彼女の祖父となれば何世紀と生きてきたはずだ。

そんな彼女のおじいちゃんが不可能と言ってただけあってそれはもう莫大な量の魔力を使うんだろうな…。

「えーっと……名前なんだったっけ……。」

「リサルフィーヌです。」

「ああ、リサルフィーヌちゃんね。リサルフィーヌちゃんは転移の術使えるの？」

「リサで構いませんよ。私は木々に囲まれて増幅^{ブースト}した状態でギリギリ^{ブースト}で所ですかね。増幅^{ブースト}適性が人一倍なんですよ、私。」

森の民たる彼らは木々に囲まれると多少魔力が上がるそうなのだが、リサはその魔力増加量がとても多いのだそうだ。

「ってことは現状手詰まり状態か……。」

「そういう事になりますね……。そういえばお名前をお伺いしてませんでしたね。」

「ああ、そういえば忘れてた。俺の名前は宮中時広、時広で良いよ。」

「トキヒロさんですか……。良い名前ですね。」

「はは、照れるな。名前を褒められる事なんて滅多に無かったよ。」

ぐくくく

緊張の糸が解けたからか、ラーメンを食い損ねた時広の腹が鳴る。

「とりあえず話の続きはご飯食べながらにしよう。」

「あ、はい。わかりました。」

とりあえず話は腹ごしらえしてからだ……。と思ったが。

ウチには食い物はさっきぶっちらかしたラーメンしかない。

しかたが無いので外食にしようと思ったが……。

「とりあえず、その服と髪と耳をどうにかしないとね……。」

「どうしてですか？ 私たちの里は人的交流はありませんでしたが他の里では比較的接触してると聞きましたが……。」

「ここはきみたちが居た世界と違ってエルフもドワーフも獣人も居ない、人間しか居ない世

界なんだ。」

「なるほど……。それは好奇の目に晒されますね。」

「物分りが早くて助かるよ。」

そういうと時広は適当に服をあさり始めた。

混乱？（後書き）

もうそろそろ良い感じになるはず。
いい加減入らないと読者も作者も飽きる……。

着せ替え？（前書き）

あらすじ

お腹が減っては戦はできぬ
という訳でご飯にいくために着替えるリサであった。

着せ替え？

「えーっと、とりあえずこんなもんで良いか……。」

比較的細めのジーンパンにゆったりしたTシャツとジップアップパーカー。

一応女の子が履いてもおかしくない……はず。

172cmで体重62kgの時広は比較的痩せ型ではあるが、さすがに女物が入るようなガリガリではない。

リサは比較的背が高い方だと思うのだが、やっぱり女の子だから細い。

胸がつかえるかな？とリサの方をちらっと見たが……。

まあ……、うん……、そこはエルフだしね……、うん……、セオリー通りっていうかまああんまり気にしなくても……。

ということでもとりあえず持ってる服の中で一番小さいのを渡した。

それでもまだダボダボだが、まあボーイフレンドファッションとあるし、平気だろ。

「とりあえずこれに着替えてきて。」

「あ、はい……。随分仕立ての良い服ですね……。」

「いや、これはこっちの世界じゃ普通だよ。むしろ悪い方。」

「これですか!？」

「まあ安いし……。そうだねーご飯一食分くらい？」

受け取ったまま愕然としてるリサ。

それはそうであろう。まるで王様が着るような滑らかな肌触りの服に綺麗な縫い目。

こんな良い服がご飯一食分で買えるなんてすごい世界だ。と時広は知らずにリサはただただ呆然としてた。

「と、とりあえず着替えてくれば？」

「こんなに良い服よろしいんですか？」

「リサは仮にも王族だったんでしょ？」

「一応そうだったのですが……。こんなになめらかな布は私たちの住んでいる世界にはありませんでした……。」

「あー……、とりあえず良いから良いから。ちゃっちゃんと着替えてサッサと飯食いに行こう。」

「あ、はい……。わかりました。」

もらった服を遠慮がちに持ちながら脱衣所に入って良くリサ。

後で彼女の服は洗濯しておいてあげよう……。地下牢に入ったって言ってた通り結構汚れてたからなあ。

少し待っている間にちょこちょこ部屋を掃除しておく。

今まではいきなりで混乱してたけど冷静に考えたら女の子が来るんだもん……。綺麗にしないと……。

女の子!!!!!!!!!!!!!!

今まで時広が意識していなかったが仮にもリサは女の子である。

そりゃあ何度かこの部屋に女は上げた事あるがそれは仲の良い友達としてだ。

いきなりあんなとびきり美人な女の子が家にいきなり現れたのである。

今までなにも考えてなかった時広はさらに混乱に陥った。

怒涛の勢いで片付け始める。

やばいやばい！こんな汚い部屋見せられないよ！！！！

明け方だと言うのに布団を干し、ブルドーザーのようにゴミを一つまめにするとまとめてゴミ袋にぶちこんだ。

選別は後でしよう……。

そして比較的寒い時期なのにもかかわらず大量の汗をかきながら部屋掃除をしていると脱衣所から声がかかる。

「あのーすいませんトキヒロさん。」

「あー、はいはい。どうした？」

とりあえずブルドーザーのエンジンを止めて脱衣所に向かう。

あー、そういえばここ異世界なんだよね。ベルトとかわからんだろうに……、俺使えないやつ……。

「あのーこれなんですけど……。」

彼女の声が脱衣所からする。

やはりきつとベルトの事だろう。

時広はなんて説明しようか考えながら脱衣所のドアを開ける。

「落ちてきてしまうのですがどうす——キャアッ!!」

「い、ごめん!!!!」

今入ってきた脱衣所のドアを勢い良く閉める時広。

リサはズボンを履く途中で俺に話しかけてきていたようだ。

と言うより落ちてきてって言ってたからきつとベルトを通すのがわからないのであろう。

そう、脱衣所でTシャツを着てパンツ丸だしのリサを見てしまっ

たのである。

今さっき意識したばかりの女の子を見せられてしまい顔が真っ赤になってしまう時広。

お約束かよっ！と内心突っ込んでみたり足綺麗だったなーと思いつ出してまた赤面したりと
にかく忙しい時広であった。

「ご、ごめん！ 覗く気は無かったんだ！！」

「す、すいません私の方こそ大きな声を出してしまっ……。」

良かった……ファンタジー小説に良くある結婚するまで肌を見せるのはご法度とかだった
らやばかった……、いや、こっちの世界にその法律は無いんだけどさ。

「と、とりあえずそのズボンを上に持ち上げたまま出てきてもらえるかな……？」

「は、はい……。」

顔を真っ赤にしたりリサが脱衣所から出てくる。

そして入れ替わりに時広が脱衣所に入るとベルトを持って出てきた。

「このベルトっていうのを腰の所のわっかに通すんだ。」

あまりに恥ずかしくて顔をみせられない時広は片膝立ちになるとリサの腰に手を回してベルトを通してあげる。

「な、なるほど……。すいません……。」

「いや、当たり前的事だよな。気付かなかった俺が悪い。ごめんね。」

それにしてもリサ細いな……。ワンピース着てたからわかんなかったけど肉付いてていい所は付いてて締まってる所は締まってるモデルさんみたいだな……。

そしてバックルの穴に棒を通しておしまい。

「はい、できたよ。少しきついかな……。？」

「いえ、大丈夫です。ズボンなんて履いた事なかったのになんか変な感じです。」

真っ赤な顔ですこしはにかむリサ。

うわ……。めっちゃかわいい……。

意識して顔を見たのは今が初めてだが、すっと通った鼻にあと1mmでもズレたら崩れるであろう完璧なバランスでパーツが配置されていて、まるで付けまつげのように長いまつげ。そ

れでいてくりつと大きい二重の目。芸能人でもここまで綺麗な人は
そうそう居ないんじゃないかな
いかと思う……。

「私の顔に何か付いていますか？」

声をかけられハッと我に帰る。

「い、いや！ 何もついてないよ！ うん！」

「は、はぁ……そうですか……。」

「うん、大丈夫！」

「ありがとうございます。あ、あとこの服着て変じゃないですかね
……？」

モジモジと体をやたら見ている。

慣れない服を着ているからであろう。

「大丈夫、すごい可愛いよ」

心の底から本音で褒めてあげる。

着せ替え？（後書き）

すこし急な感じはありましたが、導入部分はさっさと終わらせてしまいたかったので……。ちよつと無理な場所がいくつかありますが後ほど補完させていただきます。くつもりです。

それと感想にあった魔法ですが基本的には普通のファンタジーと同ーだと考えてもらって平気です。

多分もう出てこないんで。

リサの居た世界では無詠唱魔法が基本で無詠唱で行けるのは中級まで下級（対個）＜中級（対隊）＜上級（対軍）

まあ中級は範囲魔法、上級は戦術魔法と考えていただければ属性は火・風・水・土・聖の5つです

聖はヒールとかじゃなく、対アンデットとかそんな感じです。

ヒール系は水になります（体の何割は水できてるとかそんなんなのでサラはヒール系も得意です。

あと転移とかの属さない魔法はこれとはすこし違った概念ですがまあそこまで詳しくなくても良いかなと↑適当

基本的に下位攻撃魔法は全部くくブラストです

後は出てこないんで考えて無いです。

ウォーターブラストとか

ウインドブラストとか

アースブラストとか

ファイアーブラストとか

ホーリーブラストとか

考えてましたけどそっちがメインのお話じゃないので割愛。

翻訳魔法は次か次のお話で解説しますのでおまちを

あと魔物とかの設定ですが本文で書いてある以外の設定はありません
だってもう出てこないもの。

そんな感じでファンタジー部分が適当ですが読者様のイメージ力に
期待する、という形で↑逃げ

作者はエルフとバイクがかければ良いんだよおお!!!!!! (本音で
す。

外食・・・？（前書き）

あらすじ

外食に行くために着替え終わったリサであった。

外食・・・？

「あとは……、はい、これ。」

ニット帽を渡す。

耳を隠すにはこれをかぶってもらうしかない。

「こ、これは？」

「ああ、これはニット帽って言って帽子だよ。」

「随分変わった帽子なのですねえ。」

「かぶせてあげるからちよっとこっちおいで。」

手招きでリサを呼ぶとちよこちよこと近寄ってきた、やばい、小動物みたいでかわいい。

リサの頭にニット帽をかぶせてあげる。

そのときに少し髪の毛を触ったのだが、信じられないほどサラサラだった。

「はい、それじゃあ行こうか。」

「あ、はい……。」

「あ、最初に言っておくけどあんまりびっくりしないでね。」

「何ですか？」

「んー、たぶんリサが信じられないような世界だと思うから。」

「はあ……。」

いまいち良くわかっていないようだが、きっと外に出た瞬間わかるだろう。

ギシッギシッ

築60年の野差^{やさしそつ}荘は歩くだけで床が抜けるんじゃないかというくらい軋^き（き）しむ。

そして鉄製の階段を下りると目の前の道路にクルマが通った。

「ひっ！ トキヒロさん今のとてつもない速度で動いていた箱はなんですか！？」

「あれは車って言って、馬車が進化したようなものだよ。」

そこらじゅうに得体の知れ無い物がたくさんあって若干顔が青ざめているリサ。

「大丈夫だよ、この世界は平和でね。戦争どころか盗賊すら滅多に出ないんだ。」

「は、はあ……。なんだかすごいですね……。それに地面もすごく平らでとても大きな石でも使っているのでしょうか……。」

「いやいや、これはコンクリートって言ってドロドロしてるやつが乾くと石になるのさ。それを使ってるんだよ。」

「なんだかそれ気色悪いですね……。」

「まあ、聞きたい事は色々あるだろうけどそれはお店ついてからね。」

そこから歩いて数分。

全国チェーンの24時間ファミレスに入って席に座る。

「な、なんだか貴族のサロンみたいですわね……。」

「サロンに行った事があるの？」

「ええ、一度だけ……。子供の頃に父と行商で寄った貴族の家にありました。」

「へえー、遠慮しないで食べていいからね。」

そこからは少し大変だった。

メニューを見てすぐリアルな絵だと言ったりサに写真の説明をしたり、好奇心で呼び鈴を押したりサが涙目になったり、ドリンクバーのやりかたを教えてあげたり、リサが料理の美味しさに嘆息がもれたり。

ご飯を食べ終わってからすこし経って、また異世界についての話を始める。

幸いな事にまだ時刻は明け方。客はほとんどいない。

回りの事を気にせず話せるだろう。

「そう、ひっかかっていたんだけど、転移するのは場所を指定して飛ぶ物じゃないの？」

「はい、座標を指定して飛ぶ物ですね。あとはそこを省いてイメージしたり。でもイメージするには故郷などとても強くイメージできる場所で無いと駄目です。なので基本的には座標ですね。」

「じゃあなんでリサはこっちの世界に……？」

「きっと……お爺様が魔法を完成させる前に殺されてしまって、場所の指定がされないまま飛ばされてしまったのだと思います……。」

「なるほど……、そういう事ね。あ、あとリサが俺と喋れているのも魔法？」

「はい、魔法と言うよりは祝福ですね。相手に言葉を理解させたり、逆に理解したり。異国^{おもむ}に赴く場合は前者で、異国から人が来た場合は後者ですね。」

「それって俺以外にもちゃんとこっちの言葉で聞こえるの？」

「はい、私がかけたのは前者の魔法なので多分平気だと思います。私の口を見てもえればわかると思うのですが、私自身は私の母国語で喋っています。」

たしかに、言われて見れば言葉に対してはつきりとそれ以上に唇が動いている。

読唇術に長けている訳ではないが、それは一目瞭然だった。

「便利だなあ……。」

「言葉の壁は厚いですからね、これは比較的有名な魔法です。」

やはりそれは全世界一緒なのか……。

「さてと……、とりあえずリサの世界の事は聞いた。こんどはこっちの世界の説明をするね？」

「はい、お願いします。」

「えーっと、とりあえずこっちの世界には魔法は無い。その代わりに技術っていうのが発達していてね、そのおかげでここまで豊かなんだ。」

「魔法が無い……。」

明らかに顔色が悪くなっていくサラ、しかし説明は続けなければいけない。

「ここに来る途中も色々説明したと思うけど……。」

とりあえず今の世界の現状を伝える。

戦争なんかはあまりに武器の性能があがりすぎて国と国の戦争になると向こう1000年は使えない土地になるだとか、ここニホンは王政政治じゃなく民から祭り上げている人が政治をしていたりだとか。その他も色々。

「とりあえず、思いつく限りは言ったと思うけど……。なんか質問ある？」

「あ、それなんですけども、私が魔法を放った時に威力がとても小さくなってしまったのですが、どうしてかわかりますか？」

「うーん……。それは俺自身が魔法を使った事が無いからわからないけど、やっぱり魔法が無い世界っていうのが一番の原因なんじゃないかな。魔法と違って空気中の魔力とか使ったりするんじゃないの？」

「やはりそうですか……。」

後いくつかりサからの質問を受けて時広が答えるというのを繰り返した。

「そういえばリサってこれからどうするの？」

「どうするとは？」

「いや、だから住む場所とか……。当ても何も無いんでしょ？」

「そういえばそうでした……。どこか住み込みで働いてそこで元い

た世界に帰る方法をさが
します。」

「こっちの世界だと、戸籍が無いと働けないんだよ。」

「なんとっ……!」

希望の光が潰^{つぶ}えたのか、がっくりとうなだれるリサ。

まあ……、これは俺言っても罰当たらないよね……? ?

ボランティア、そうボランティアなんだ!! !

「よ、良かったらしばらく俺ん家に居て良いよ?」

外食・・・？（後書き）

お前導入長すぎとかしかられそうですね。

すいませんごめんなさい作者も甘いのかかきたいんです。

だけど飛ばすに飛ばせないんですごめんなさい。

お掃除（前書き）

あらすじ

異世界の文化に触れるリサ。
そして時広が勇気を振り絞って言った一言に対するリサの反応は？

お掃除

「本当ですか!？」

目をパァーっと輝かせて非常にうれしそうにするリサ。

「で、でもやはり迷惑じゃ……。」

「いや、大丈夫だろうん。狭いけど片付ければ人二人寝れるスペースはあるし……。それに

なんかの縁じゃない？ 日本人ってのは縁やゆかりってのを重んじる民族なんだよ。日本の

格言に旅は道連れ世は情けってのがあるくらいね。」

「その……、本当に良いのですか？ お金などは持ってませんし……。」

「良いよ良いよ、人一人くらい増えたって平気平気！ ……多分。」

いや、今趣味に裂いてる金を食費とかに回せば全然平気なはず……。

マグラの油圧クラッチはしばらく見送りだな……。

「でもやっぱり悪いです……、ここまでお世話になったのに……。」

「んー……、リサって家事とかできるの？」

「あ、はい。私昔からちょっと体が弱くて家にこもってばかりだったんです。それで良く

お手伝いさんと一緒に料理作ったりとかお洗濯したりしてたんですよ。」

どうだ、と言わんばかりに胸を張るリサ。

「じゃあさ、俺がリサの事雇うよ。お給料はご飯とその他もろもろで、住み込みで働いてみない？ 仕事内容は家事全般。自慢じゃないけど俺料理下手なんだよね……。」

これなら良いだろう、ご飯作るのは本当に苦手だし。

それに掃除も滅多にしないし……、面倒臭いから。

「でも……、本当に良いんですか……？」

「俺が良いって言ってるんだから良いの！」

すこし恥ずかしくなってそっぽを向いてしまう。

きっと今の俺の顔はすこし赤みがさしているであろう。

「じゃあ……、おねがいします。」

少し伏目がちにリサが言う。

それ反則だって……。

「うん……、よろしくね。リサ。」

「はい、こちらこそ。トキヒロさん。」

満面の笑みのリサが眩しすぎてまたそっぽを向いてしまう。

ず、ずるいよりサ!!

そこからファミレスを出て、タバコに火を付ける。

長い事吸ってるブラックデビルのミルクココナッツ。

いつもならファミレスで遠慮なく吸うが今回はリサがいるために遠慮した。

外なら風があるから平気だろう。

「あ……、すごく良い香りですね……。とても甘くて優しい香り……。」

「ああ、ごめんごめん。これタバコって言って葉巻みたいな物なんだ。迷惑だったかな？」

「いえ、お爺様も葉巻は嗜たしなんでいましたので大丈夫ですよ。」

「そっか……。煙かったら言ってね。」

「はい。」

それからタバコを吸いつつ歩いて帰ってくる。

「とりあえず……。掃除しなきゃね。」

ゴミ屋敷と化してる家を掃除しなければ布団が敷けないし……。なにより俺が恥ずかしい。

「初仕事ですね！ フフッ。」

「ああ、俺も手伝うよ。」

「お願いしますね？」

それからしばらくゴミを適当にぽいぽい捨てて行き、あらかた捨て終わった後にカーペットをコロコロする。

あの粘着テープのやつね。

そしてリサはというとビショビショの玄関を掃除していた。

そういえば……。

「リサ、そういえばさ。」

「はい？　どうかしました？」

「いや、俺に言葉の祝福かけた後に魔力尽きたって言ってなかったっけ？」

「ああ……、あれですか……。あれは嘘です。もしトキヒロさんが蛮行に及ぶ危険性も考え
て多少は魔力が残っている状態でした。」

まあたしかにいきなり見ず知らずの男の家に転移したらそら警戒するわな。

うん、納得。

「さてと、あらかた片付いたかな……？」

「はい、かなり綺麗になりましたね。」

「うん、ありがとねえ……、ふぁあー」

大きな口を開けて欠伸をする。

「そういえば俺まだ寝て無かった、バイトから帰ってきたら飯食って寝るってのが最近のリズムだったからなあ……。」

「トキヒロさん寝ますか？」

「んー……、リサは眠く無い？」

「正直少し眠たいですね……、ほとんど寝てませんし……。」

「ああ……、そりゃ里襲われてたら寝る暇無いよな……。」

俺はあえてその話題には触れずに喋りだす。

「わかった、布団一組あるから使ってくれ。」

友達が泊まる時なんかを使う布団を押し入れからひっぱりだす。

掃除して良かった……。掃除しなかったら布団敷くスペースすらなかったからな……。

「あ、これ洗濯してから使って無いから綺麗だと思う……。」

「あ、そこまで気にしてもらわなくても大丈夫ですよ。」

クスツと笑うリサ。

その一動作だけでも絵になる……。

「と、とりあえずここに敷いて置くね。」

俺の布団から離して布団を敷く。

狭いからそんなに離れていないが……。まあリサは女の子だからきっと近いと嫌がるだろう……。

「あ……、寝巻き……。」

俺は基本的に着の身着のまま布団に飛び込んで寝るから構わないけど……。

「いえ、気にしていただかなくても本当に平気ですよ？」

そうリサは言うが寝巻きくらいは用意してあげた方が良さだろう……。

「と、とりあえずこれ着といて。今度買いに行こう。」

XLサイズの上下グレーのスウェットを渡す。

正直彼女じゃダボッダボになってしまいうだろうが……。まあ、きついよりはゆるい方がいいだろう。

「すみません……。ありがとうございます。」

それを受け取って脱衣所に向かうリサ。

スウェットはヒモ式だから平気だろう。

しばらくすると上下スウェットに着替えたリサが出てくる。

今までかぶってたニット帽も脱いで、綺麗な銀蒼髪が見える。

うん、やっぱり綺麗だ。

ダボダボのスウェットもなんか言い表し辛いけどぐつと来る物がある。

「この寝巻き、とても肌触りが良いですね……。それにいい匂いがある……。」

「うわ、ごめんっ！ ヤニ臭くない……？ 大丈夫？」

「はい、さきほどの甘くて良い匂いがします。」

くんとスウェットの匂いをかぐリサ。

なんか本当に犬みたいでかわいいな……。

「そ、それじゃあおやすみ……。」

赤くなった顔を隠すため、布団にさっさと潜り込む。

「はい、おやすみなさい。トキヒロさん。」

「あ、ああ。おやすみ、リサ。」

今までの生活に無かったそのとても優しくて美しい声が俺の頭の中に反復しながら、俺の意識はすぐに落ちた。

これから、俺の新生活が始まるんだな……。

その時の時広の顔は幸せに満ち溢れていた。

お掃除（後書き）

これにて第1章とかそこらへん終了です。

次の章はリサがこの世界に慣れ親しんで行く所とか新しいキャラとか

そして書きたかったバイクの描写とか出てきます。

正直長かった……。

しかし作者が書きたかった所はここから始まります。
お楽しみに。

そしてPV1万ありがとうございます！！

まだ物語が全然進んでいないので企画とかできないのが悲しいです；

この場にて感謝を示したいと思います。

この物語を読んで下さっている皆様に最大の感謝を。

ご飯ですよ（前書き）

えー、導入部分が終わりましたので、ほのぼの物語りに入りたいと思います

なのであらすじは必要無いかと思ひまして今話からあらすじはありません。

でも2〜3話に渡って続くお話ならあらすじは挿入させていただきます。

ご飯ですよ

ふと目が覚めた。

枕元に置いてある携帯で時間を確認すると時刻は10時半と言った所。

基本的に明け方に寝て夕方起きるってのが俺の生活リズムなんだけどこんなに早く起きるのは珍しい。

左手を伸ばすといつも置いてあるはずのブラックデビルとジッポーが見当たらない。

寝起きは布団からしばらく動きたく無いのだがしょうがない。

時広は置きあがり右手の方を見るとリサが寝ていた。

「やっぱり疲れてたんな……。」

頭をガリガリと搔いてからキッチンの換気扇の下に座る。

そういえば昨日寝る前にリサに悪いと思って換気扇の下でタバコを吸っていた。

慣れ親しんだ動作でタバコを一本取り出すと火は付けずにしばらく咥えてポケットとしていた。

んー、今日はリサの身の回りの物を買に行こう。

見慣れない物をすこしはしゃぎながら見て回る彼女を思い浮かべて自然と頬が緩む。

そしてタバコに火を付けると深く吸い込んで吐いた。

寝起きでよどんでいた頭や体に煙が染み渡る。

一口吸って行くごとにだんだんとクリアになっていく。

そして吸い終わった後火消しに突っ込む。

リボルバーの弾倉のような見た目のやつである。

それから洗面所で歯磨きと洗顔を済ませてからすこしリサの寝顔を見る。

軽い気持ちで見たのだったが……。

彼女の目からは多数の涙が流れた筋があった。

やはり年頃の女の子なんだな……。

まあ、もし俺がそうなったとしても泣いていたかもしれない。

異界という全く知らない土地。

そして里を襲われ知り合いはほぼすべて死んだのであろう。

それでも彼女は強かったから、気付けないでいた……。

本当は死ぬほど怖いし、死ぬほど心細いのであろう……。

俺はリサの力になりたいし、リサも俺を頼って欲しい。

だけど彼女は強いから……、きっと俺に頼らないし力を貸してくれとも言わないだろう。

でもそれは駄目な気がした。

なにが駄目かは解らないけど……、きっと駄目だ。

とても辛そうな顔をしてるリサの頭を軽くなでてやる。

すると今までの顔が嘘のようにすっ……と安らかな顔に変わった。

悪夢でも見ていたのであろうか……。

今は荒かった呼吸も落ち着いて大分楽そうだ。

「少しは力になれた……かな？」

それからしばらくリサの頭を撫で続けた。

とりあえず満足したのでサラの頭から手を離して朝食の準備をしているとサラが起きてきた。

「おはようございます、トキヒロさん。」

「ああ、おはよう。タオルは何使ってもいいから顔あらってきな。あと柄が白い歯ブラシを置いておいたから使って。使い捨ての歯ブラシなんだ。」

「はい、ありがとうございます。……あれ？ 朝食をお作りになっているのですか？」

「うん。スクランブルエッグとベーコンだけど……、大丈夫かな？」

「あ、はい。同じような物を見た事があるので大丈夫だとは思いますが……。ご飯の支度は私の仕事では……、申し訳ありません。」

「いやいやいや！！ 今はまだ食材とかの説明してないから良いよ！ それに疲れているだろう？ 気にしないで。」

「はあ……、ですが。」

「いいからいいから！ はい、チャッチャと歯と顔洗って来なさい！」

「すみません……、ではお言葉に甘えさせていただきますね。」

しっかりと引き際をわきまえているあたりはさすが王族、と言った所かな……。

このまま話し合っても解決はしなかったであろう。

リサの新たな一面を見れた時広はすこし上機嫌になりながら卵を炒めていた。

「ケチャップ大丈夫……？ トマトって言って赤い水分を多く含んでる野菜を味付けて煮込んだ物なんだけど。」

「なんだか毒々しい色をしていますけど……。」

「大丈夫だと思う……、多分。一口舐めて見る？」

「あ、はい。興味があります。」

そういうとスプーンにケチャップを少し垂らしてリサに渡す。

若干戸惑ったりリサであったが、意を決して口にするとパアツと顔が輝いた。

「これはとてもおいしいですね！ 甘みと塩加減が絶妙でとても深い味です。」

おお……、プロの料理人みたいな意見だな……。

これはこういう物だ、と思って使っていた俺にはかなり意外だった。

「そしたらこのスクランブルエッグって言うんだけど、これはそっちの世界にもあったんじゃない？」

「はい、卵は栄養価が高いと言われて食事には欠かせませんでした。」

「それはそっちの世界でも一緒なんだね。」

とりあえず食事にあまり差は無いようだ。

食文化ってのは全世界共通で進む物だからな。

「あとこっちの肉はベーコンって言って塩をまぶして煙で燻^{いぶ}して余計な水分を飛ばして保存が効くように作られた保存食ってやつだね。」

「私たちの里は肉が重要だったので基本的には干し肉にしていますね。塩は高価で森の中なので滅多に手にはいらないのです。」

その代わり香辛料なんかで味を調えていたのだそう。

たしかに森の中なら自生しているハーブやらが大量にあるだろう。

「あとはこれ、味噌汁。日本人とはとてもなじみが深いスープだ。料理……とは言えないかもしれないけど日本を代表するスープだよ。豆を発酵……、少し腐らせて作られる味噌って、このお湯に溶かして飲むんだ。」

時広は大の味噌汁好きでパンだろうがパスタだろうが、かならず味噌汁を付ける。

しかも昆布とアゴ（トビウオの干し）と鰹節でダシを作って冷凍保存して使っている。

味噌も出汁入りではない無添加の味噌を使っているし、とにかく味噌汁に対しての熱意は半端じゃない。

だがほかの料理はまるつきり興味が無く、味の素だって使うし基本的にカップラーメンだ。

「このミソシル、というスープはとても美味しいですね……。後から後から口の中に旨みが広がっていきます……。」

大好きでこだわり抜いた味噌汁を褒めてもらった時広の顔は満面の笑みだった。

ご飯ですよ（後書き）

作者も味噌汁が好きです。

さすがに時広ほどこだわってはいませんが…… W W W

パンと味噌汁

パスタと味噌汁

味噌汁はなんにでも合います。

一度シチューを作った後に味噌汁をつくってしまい

なにしてんだ俺ってなった事があるくらい味噌汁が好きです。

ういんどーしょっぴんぐ

朝食を食べた後はリサ用のパジャマや色々な物を揃える為に電車で数駅の大型ショッピングモールに来ていた。

そのショッピングモールは町として作られるほど大きく、駅もできたりなどとてもない大きさを誇る。

敷地面積26万平方メートル、全長1kmにも及ぶ国内最大のショッピングモールだ。

電車ではしゃいでいたりサであったが、さすがにこのショッピングモールを見たら黙った。

「と……、とても大きいですね……。大陸一の城よりも大きいのではないでしょか……。」

「見た事あるんだ？」

「はい、一度だけですが。」

「まあ、このショッピングモールってのは商人が小さい店を出し合っていてできる大きな商人ギルドの建物みたいなものだよ。食べ物、洋服、生活必需品はもちろん家具や果ては車も売ってる。」

「す、すごいですね……。」

「まあ……、ここで揃わない物はほとんど無いんじゃないかな……。」

「な、なるほど。」

「それじゃあ行こうか！」

意気揚々と歩き出す時広。

今日は休日と言う事もあってかなりこんでいる。

広々と育った影響かりサは人混みかあまり得意ではないのか電車でも少し困惑気味にしていた。

まあ、電車が走ったらそんな事は吹き飛んだようだが。

「良い？ はぐれそうになったら俺の名前を呼んでね？ あとは見たい物があつたら立ち止まらないで俺を呼ぶ事。」

「はい、よろしくおねがいします。」

今日はリサが迷子になっても見つけやすいようにすこし派手なパーカーを着せた。

目がチカチカします。とりサは言っていたがまありサの格好より奇抜な人なんて掃いて捨てるほどいるから特に目立ちはしないだろう。

今日もニット帽をかぶせていた。

なんだかスケボーを持たせたら似合いそうな格好である。

それでもかわいいんだけどね!!

リサの顔立ちが完全に外国人なのでそこは少し心配していたが、外国人の客が多いのかあまり目立つ事は無かった。

しかし当の本人は初めて見る物ばかりで大興奮し俺をあちらこちらと引っ張って言った。

俺の腕を引っ張ってそのまま腕に張り付くように見ているので本人は気付いていないだろうが完全にカップルである。

「ふわぁ……、すごく良い匂いします……。あの輪っかみたいな食べ物は何ですか？」

「ん、あれはドーナツって言ってパンを油で揚げたお菓子だよ。」

目がキラキラを通り越してギラギラしているので買ってあげた。

俺は甘いものは嫌いでは無いが進んで食べようとは思わないので遠慮していたがリサが美味しい美味しい言っすすめて来るので一口もらった。

なんだかたべかけの物を貰うのって恥ずかしいな……、リサは全く意識してないみたいだけど。

そこらへんはやはり文明の違いと言うものであろう。

向こうは貰える物を遠慮するほど食が充実していないはずだ。

それからアイスや色々な甘い物を買って食いはあまりの美味しさに泣きそうになっているリサを見て、やっぱり女の子なんだなと俺は思った。

今は辛い事なんて忘れてリサに楽しんでもらおう。

それが彼女に対して俺ができる事。

そこからしばらく歩いてお目当ての雑貨屋に寄りマグや茶碗や箸など色々買っていく。

あとはテーブル。

今まではおきっぱなしだったのだが布団を常時二組敷く事になったので折りたたみ式のを買う事にした。

そっちのほうがかさばらないし。

この雑貨屋は非常にお洒落ですこし高いのだが、リサが気に入ってくれたのでそんなのは痛くも痒くもない。いや、多少痛いけどね？

キャツキャ言いながらクッションや色々な小物を見ては「綺麗……。」やら「美しい……。」やら言って表情がコロコロ変わるのを見ていて楽しい。

それから小2時間ほど雑貨屋だけで過ごした俺たちは会計を済まして（俺のオーリンズ足回り貯金が……。）またリサの買い食いツアーの再開をした。

俺は歩きながら食べれるミラノサンドを買ってリサと一緒に買い食いをしまくった。

甘いものだけで樋口一葉とサヨウナラとは……、リサお主やりおるな。

終始ニコニコとしているリサは本当に見ていて楽しい。

それに説明にも一々びっくりするのだから説明しても飽き無い。

本当に一緒に居て楽しい子だな……、と思った。

と、リサがいきなり止まった。

いまだにリサの腕は手に回ったままだ。

それにつられるようにガクンとなったのでまた食い物か……、と思ったが違った。

今リサが立ち止まってるのはアクセサリーのお店である。

あまり派手な感じではなく落ち着いていて男性客もこれぐらいならあまり入り辛くは無いだろう。

そしてリサの目線の先には数珠のようなブレスレット。

うん、文句無しでお洒落だな。

余り自己主張の強く無い細いタイプのようだ。

アミュレットだろう、多分。

あまりそういうのには詳しく無いがパワーストーンに見える物が繋がれている。

「時広さん。」

「はいはい。」

「こちらの世界には魔法が無いのでしたよね……？ なぜこんな所に魔装が？」

「魔装？ そのブレスレットの事かい？」

「はい。このような珍しい石には力がこもっていてその大半は魔力を強化してくれる物がほとんどなのです。」

「ほー、それは魔装ではなくてアミュレットって言うってお守りみたいなものだよ。こっちの世界にもなにかしらの力があるんじゃないかって言われててね。実際は何も無いみたいだけど。」

そこで店員さんが話しかけてくる。

「そちらのアミュレットのブレスレットいかがですか？　こちらに使われている石はセラフィナイトと言いましてこの白い模様が天使の羽のように見える事からそのような名前が付けられています。リラックス効果なんかが期待できますね。ただしセラフィナイトは干涉を受けやすい石なので他のアミュレットとご一緒に使われてしまいますとセラフィナイトの本来の力が発揮できないので一つのみ使われる事が望まれます。」

ほー、そんな効果があるのか……。

でもこの深緑に白い模様はまるでリサみたいだな。

なんだかりサ目がキラキラしてるし。

これ欲しいのかな……？

値札を見ると驚くほど安い。

てっきり1万円くらいするかと思ったが3000円くらいなので全然安い。

「ああ、じゃあこれ下さい。」

一瞬リサが俺の顔を疑問符付きの顔で見てる。

「トキヒロさん付けるんですか？」

「いや、リサにプレゼントするよ。」

「え、ええ!!??」

「いや、なんかこれリサに似合うと思ってさ。」

「いや!!　こんなに高そうな物は貰えませんよ!!」

「何いつてるんだい、安いよ。君が今まで食べてきた金額の半分くらいだよ。」

きっとリサは魔装とか言ってたからかなり高額な物だと思っていたのであろう。

リサの食費のが高いわ!!　と突っ込みたいが俺は別に構わない。

「な、なんと……。でも本当に良いんですか？」

「俺が良いって言ってるんだから良いの。」

と、言うとりサは本当はうれしかったのか満面の笑みを咲かせた。

うんうん、それが見たかったんだよ。

つついニヤける時広であつた。

ういんどーしょっぴんぐ(後書き)

ほのぼのしてきました。
書いてて楽しいです。

およーふく(上)

大量の荷物を持って家に帰ってきたリサと時広。

両手には抱えきれんばかりの雑貨や生活用品が抱えられている。

それらを取りあえず家に並べてリサにあれこれ説明をしながら時広は今後の問題点である1つを考えていた。

それはなにかというとりサの服の話である。

時広に女装の趣味なんぞ無く、故に持っている服はすべて男性用の服だ。

これは早急に対処しないとまずい。

別にリサは「随分動きやすい服ですねー」と気にした素振りはないのだが、やはり女性用の服を着せた方がいいだろう。

しかし、リサはエルフなのだ。

耳がとがっているためにニット帽は外せない。

それにこちらの世界の常識を知らないから買いに行かせる事もできない。

時広も女性服を買いに行くのはご遠慮願いたいし。

それで頭を悩ませているのであった。

「時広さん、夕ご飯は何か食べたい物がありますか？」

「んー、特に無いけど．．．．．。リサの得意料理食べてみたいな。こ

っちの世界で作れるものある？」

「えーっと、トキヒロさんが説明してくれた野菜はこちらにある物と大差なかったのだからそのまま使えると思います。じゃあトキヒロさんのミソシルのようなエルフ族伝統のスープを。これが評判なんですよ？」

「ほお、それは楽しみだ！」

エルフ族伝統のスープか．．．．．。すごく楽しみではある、が、し

かし時広には先に服の問題の解決をしなければならなかった。

「とりあえずあいつに相談してみるか．．．？」

でもエルフって説明したらなんか面倒臭いことになりそうだしなあ．．．．．。」

リサの小気味良い包丁のリズムを聞きながらウンウン悩んでいる時広の耳に聞き慣れたエキゾースト・ノート排気音が聞こえてくる。

アイツだ！！

「リサ！ とりあえずニット帽かぶって！！」

今は部屋着として上下グレーのスウェットを着ているリサにスウェットを被せる。

「なんてタイミングだよ！ 噂をすればって奴か……………」

重低音を響かせた排気音は時広のアパートの前で止まった。

とりあえずいずれはバレると思っていた。

まあ、遅かれ早かれって奴だ。

もうどうにでもなれ！ と時広はリサにそのまま料理してもらっていた。

「いやっほ〜時広さん！ ブレーキシュー持ってきて……………た……………よ？」

およりふく(上) (後書き)

およーふく(中) (前書き)

くあらすじく

時広の家に押しかけてきた謎の女性。
彼女の正体は!?

およーふく(中)

「ひとんち入る時くらいにつくしてから入れ。」

「あー、ごめんなさい。ってそんな話してる場合じゃなくて!!
この女の人は誰ですか!？」

先ほどから話に全く付いていけない困惑気味のリサを指さす
コイツ。

大学のツーリングサークルで知り合った珍しい女。

名前は谷中^{やなか} 奏^{かなで}、年は俺の1個下だ。

通称「ばかなで」

女にしては珍しく大のバイク好きでバイクを持っていない状態で
ツーリングサークルに入ってきたんだがバイトしてこつこつ貯め
た金でYAMAHASR400を買った。

なんでも俺に影響されたらしい。

ちなみに俺が乗っているバイクもSR400。

ボアアップして正確には524ccだが。

まあ、俺のバイクの話は後々話すとして。

なんで奏がここにいるのかという俺がブレーキシューをそろ

そろ交換しようとしていたら奏もやってほしいとの事なのでついだからとやってやる事になっていたのだ。

今日。

あああああ！！！！　なんで忘れてた俺！！

まあ確かにあれだけどたばたしてたら忘れるかもしれない……

「えーっとだな……、この人はリサさんっていつてとある事情でうちに居候する事になったんだ。」

「とある事情ってなんなんですか！！　てか確実に怪しいですよね！　怪しすぎます！」

「初めまして、私リサルフィーヌ・マルガナサツ・ウィンディーヌと申します。お見知り置きを。」

その優雅な身のこなしとあまりにも流暢な日本語にポカンとしている奏。

「ばかなで、惚けてないで挨拶くらい返せよ。日本人だろ。」

はっと我に帰った奏は慌てて頭を下げる。

「や、谷中奏です！　に、日本語お上手なんですネ……………」

「いえ、元々この地で育ったんですよ。見た目が違うだけです。」

上手に嘘を付くりサ。

こういう所もすごいと思う。

慣れない名前だからか非常にどもりながら奏が喋る。

「え、えーっと。リ、りさるふいーぬさん？」

「リサで結構ですよ。何でしょうか。」

「えーっと．．．．．、なんか時広さんにされてないですか？」

「いえ、トキヒロさんには良くしていただいています。」

「あ、本当ですか！」

たったそれだけの会話でなにがわかるというのだからわからないが、彼女たちにはそれで伝わったのであろう。

俺の信用何処行った．．．．．。

およーふく(中) (後書き)

奏 登場です。

次回「およーふく(下)」です。

ようやく時広の愛車が出てきます。

いるかどうかはわかりませんがバイクヲタの人に少しでも作者のバイク熱が伝わればと思います。

およーふく(下) (前書き)

携帯で書いてみました。

信じられないほど時間かかった…、親指痛いです。

およーふく(下)

「そうだ、丁度良かった。実はな、相談が合って呼ぼうか悩んだんだよ。」

「なんですか、急に改まって。てか今日私が来る事完全に忘れていたんでしよう、どうせ。」

ぎくつ。

相変わらず痛いところを突くのが上手い。

ばかなでのくせに…。

「まあまあ、とりあえずだな……。リサなんだけど実は着る物が無くて困ってるんだよ。いつまでも俺の服着てる訳に行かないだろうし。だから奏の服貸してやってくれないか？そんな身長も変わんないみたいだし。」

今さらだがリサも奏も背が比較的高い。

たしか奏の身長は167くらいあったはずだ。

それに大差ないリサはきつと165以上あるだろう。

「んー、私は構わないんですけどリサさんは大丈夫ですか？」

「はい……。しかし、トキヒロさんの服でも私は構いませんのに。非常に動きやすいですよ？ この服。」

「やっぱりリサも女の子の格好した方がいいよ。」

これは本当の事だ。

そこは女の子なんだからきつと着飾りたいだろう。

け、決して俺がリサの私服姿を見たい訳じゃないぞ!?

本当だからな!!

「そうですか…、ではカナデさんお願いします。」

「りょうかーい!! 任しといて!! それと時広さん鼻の下伸びてますよ。」

なんだかひどい目で見られたが決して鼻の下は延びてなかったはず…。

「伸びてねえよ!! てか悪いな、気使わせちゃって。」

「今度なんか奢ってくださいよ?」

「おう、今度欲しがってたステップあげるよ。」

「え!?! 本当ですか!?! うわぁ嬉しい! あれ高くて手出せなかったんですねー」

バイクパーツをもらって喜ぶ女ってのも本当珍しいと思う。

まあ、腐らせておくのも勿体無いしな。

「とりあえず亮呼^{りょう}んどいて。服運ぶのに車無いとつらいでしょ。」

「はい。」

亮って言うのは俺の同い年で同じサークルに入っていた。

見た目はチャライのだが中身もチャライ。

だけど頭は良いし見た目も良い。

さらに社長の息子って事で金もある。

でもやるときはやる男なんだよ……。

まあ、悪いやつじゃない、てか本当良いやつ。チャライけど。

「んじゃ俺はちゃっちゃと交換しちゃうわ。」

「お願いしまーす」

もうすでにリサと仲良くなったのかりサとなかむつまじく喋っていた。

なんか微笑ましいなあ……。きっとリサも少しは楽しいと感じてくれているかな。

工具箱片手に下に降りた。

2台並んでいるSR。

トラック仕様のスカチューン。

ピンクのトライバルタンクがトレードマークの奏のSRだ。

その隣に並んでるカフェレーサー仕様のSRが時広の愛車だ。

セパレートハンドルに弾丸ライト。付いてるミラーはベリーシヨート。

極めつけはバックステップにシングルシート。
いわゆるカフェレーサースタイルと言うやつだ。

タンクはレッドサンバーストカラー。

その脇から見える大口径のレーシングオイルクーラー。

そこにアクセサリとしてキラリとレーシングオイルラインが
光る。

このSR、見た目だけじゃなく中身にもかなり手が入っており
カムシャフト交換にハイコンピピストンを組み込んでかなりのトル
クを生み出す。

ツーリングサークルに所属していた時広であったが愛車はかな
りレーシーであった。

とりあえずさっさとキャリパーを分解してシュー交換に移る。

これくらいは慣れた物でさっさとやってしまう時広。

交換し終わったらエンジンをかけてちよつと走り異常が無いか確かめる。

「やっぱりアップハンは運転しやすいなあ、セパハンだと腰滅茶苦茶痛くなるからなあ……。」

しかしセパハンは俺のジャスティス。

今さら変える気は無いのである。

工具をしまつて部屋に戻るとなんとも言えないおいしそうな香りが漂う。

キッチンでは女子二人で一緒にご飯を作っていたみたいだ。

鍋をかきまわしているリサとなにかの下処理をしている奏に話しかける。

「おー、美味しそうな匂いだなあ。腹減ってきちゃったよ。」

「お帰りなさい、トキヒロさん。」

「あ、おかえりなさい。どうでした？」

「おう、ばつちしだぞ。それと要所に油差しといたから。」

工具箱をしまいつつ話す。

それにしても本当に良い香りだ……。

「リサさんとっても料理上手なんですよ、時広さん！」

「ふふ、ありがとうございます。そういうカナデさんも非常に手慣れていますね。」

口に手を当てて上品に笑うリサ。

「いやー、ずっと独り身だとこんなんばっか上手くなっちゃいました。」

テヘヘ、なんて良いながらまんざらでも無いようだ。

よく奏と亮と遊ぶと奏が飯を作ってくれる事があるが本当に旨い。

「ほー、ちなみに奏はなに作ってるんだ？」

「あ、チキンステーキですけど。リサさんが作ってるスープは洋風っぽいで合うかなーって。」

鶏肉の筋とりをしてたからそうかとにらんでいたけど正解だったか。

奏の作るソースは恐ろしいほど旨い。

一回試しに作ってみようとしたが全然駄目だった。

しばらくテレビを見ながら料理の完成を待っているとこんがり焼けたチキンとじゃがいものポタージュだろうか。スープが運ばれ

てくる。

「おー！ 旨そう！」

「私が居た所だとジャガイモが沢山取れるので潰してスープにするんですよ。」

漂ってくる香りはハーブが効いているのか、とても爽やかな香りだ。

やはりリサの料理は香辛料が多いんだな。

って事はカレーとかあったのかな、今度聞いてみよう。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

時広に続いて二人が言う。リサも習慣に合わせてくれたのであろう。

ポタージュもチキンステーキも非常に美味しかった。

「ふー、食った食った。食器は俺が洗っとくから二人ともくつろいでて。」

「あ、私がやりますよ？」

「トキヒロさん、そういうお約束じゃないですよね？」

「ご飯を作ってくれたお礼に皿を洗おうとしたのだが拒否されてしまった……。」

「わかったわかったから二人ともそんな睨まないでくれ。」

両手をあげて降参のポーズを取る。

「じゃあ頼むな。」

「はい。」

二人とも満面の笑みでお皿をさっさと片付ける。

俺はそんな二人を見ながらタバコをふかして幸せを噛み締めるのであった。

およーふく(下) (後書き)

ー時広のこだわりSRパーツ紹介ー

ここの部分は完全に蛇足なので読み飛ばしていただいても大丈夫です。

時広の愛車のSRはキャブ仕様(詳しい年式は決めてないです。強いて言うなら96年式・・・?)。

奏の愛車は11年式のSRです。

時広のタンクは25thモデルタンクレプリカです。

足回りは移植されて前後共にディスクブレーキになってます。もちろんキャリパーはブレンボ、彼もまた特別な(r y

しかしサスペンションはいまだにオーリンズではない、しかもボアアップしたのに油圧クラッチじゃないお陰で彼の左手の握力は日に日にアップしています。

ステンレス系の外装は一式ペイトンプレイスです。

金があるのか無いのか良くわからないカスタム。

マフラーはデルスラーラのスレンダーボーイ。

セパハンはエースバー?です。

マフラーが超アップ仕様なのでシングルシートになってます。

シートはタックロールシート(こだわりワンオフ)

ナンバーはサイドに縦に付いてます(違法だから真似しないでね!)

本当は事細かに決まっています。(というか自分のしたいSRカスタムなだけですw)

お前ファンタジーの設定もうちょい練れやとか言われたら返す言葉もございません。アセアセ

次回チャラ男の亮君登場です。

ちゃーらー、へっちゃらー(前書き)

ここから超不定期更新になります。

物語は完結させる予定ではありますが、新しいPCを買ったら新たに編集して(新)として投稿させていただきます。

いつになるかはわかりませんが少なくとも1年以内には買う予定です。ですのでそこまでは超不定期更新です。

ちゃーらー、へっちゃらー

フアーンフアーン

「この特徴的なホーンは……、亮か？」

「亮さん早いですね。」

「リョウさん……、とはどのような方なのですか？」

「んー……チャラ男……？ 奏なんか浮かぶか？」

「亮さんを説明するのにチャラ男以外の説明は要らないんじゃないですか？」

チャラ男というのが良くわかっていないリサだったがまあそういう人なのだろう、見ればわかるとウンウン唸ってる二人を見て思った。

カツン、カツンと段々足音が近くなるにつれてリサの緊張は高まっていく。

チャラ男とは一体なんなのだろうというリサの期待を裏切るのと言わなくてもわかったであろう。

そしてとうとう扉が開く。

「ウーッスウーッス、時広お疲れちゃん。」

そこに登場したのは髪の毛をまるでライオンの鬣たてがみのように逆立てて前髪が顎より長く、襟足えりあしなど下手な女性より長いんだか得体の知れない男が居た。

キンキラに光るTシャツの上から白いレザージャケットを着いてズボンはボロボロ。

髪の毛の色は金色で所々に白が入っている。

そしてせわしなく自分の襟足をいじっている。

なにこの人怖い。

リサがはじめて亮に抱いた感想はこれだった。

「おー、亮。わりーな。ちょっと足が必要になっちゃってよ。」

「んー、俺ヒマしてたっし余裕よ？ つーかその美人さんだれよ、ちよい軽く俺に紹介してくんね？」

「あー、そうそう。ちよつと事情があって家に居候することになったりサさんだ。見た目は外国人だけど中身は日本人だから安心していいぞ。」

そういうとリサは軽くお辞儀する。

しかしその顔は始めてみる種類の人間に対してかなり警戒していた。

まあ……、わからなくもないけど。

「んでこっちは亮。俺の大学の時の同級生で俺たちの中で車持ってるのがコイツしかいなかったんだ、だから呼んだ。決して悪い奴じゃないから安心してね。見た目はアレだけど。」

「ちよ、見た目アレとかひどくない？ まじばねえ。リサちゃんよ

ろしくね、なんかあったら俺頼っちゃって良い系だからヨロピク。」

ばねえ？　良い系？　ヨロピク？

初めて聞く単語に翻訳魔法も機能してないのか顔を引きつらせながら亮と握手するリサ。

まだ信用できないのであろう……。本当に悪いやつじゃないのになあ……。

「とりあえず自己紹介は終わった事だし、奏の家行くか？」

「あ、はい。今散らかってますけど大丈夫ですよ。」

「それ大丈夫じゃないっしょ、奏ちゃん相変わらずな感じね。わかるわかる。」

「ちょっと亮さんは黙っててください！！　ほら、リサさん行きましょう？」

「フフ、はい。」

なんだかとても仲が良さそうで良いですね。

リサはそれを口に出すことなく心の中で呟いた。

本当に皆さん良い人そうでした。

まあ……、見た目が奇抜な人なんて掃いて捨てるほどいましたしね……。

リサが亮の見た目と言動に慣れるのは大分先のお話。

「んじゃちょっとまっといてねー、車回してくっから。」

「おう、わりーな。」

「よゆーよ、よゆー。」

鍵をチャラチャラ鳴らしながら何処かに行く亮。

なんかそんな所までチャラチャラしてんだな。

奏に聞こえないように時広はリサにこれから起きるであろう事態に備えておく。

「えーっと、これから馬車が来るけどこっちの世界の馬車は馬が無くて荷台だけで走るような感じなんだ。それとすこし五月蠅うるさいと思うけど我慢してね。」

「はい、わかりました。」

リサがどんな物が来るのだろうと期待していたが、またまたしてもその期待は裏切られる。

ドンッドンッドンッ。

ウーファーから流れる重低音に同調するかのように車体が軽く揺れる。

そして極太のマフラーから流れる音と相まってとんでもなく近所迷惑だ。

ゼロクラウンアスリートセダン。

亮の愛車である。

隙間あるのか？ という車高の低さに眩しいくらいに光っている
大口径ホイール。

なんだかいかにもな感じなのだが車を出してもらっている身分なので何も言わない。

案の定リサは隣で固まって顔ひきつらせてるし。

「く、車というのはみなこういう物なのですか……？」

「いや、これが特別なだけ。普通はもっと静かだよ。」

ヤレヤレと時広が説明する。

普通の車はこんなに車高が低くない。

助手席側の窓が開くと亮が顔を乗り出して叫ぶ。

叫ばないと聞こえないのだ。

「お待たせ〜！」

とりあえず後部座席のドアを開けてリサに乗ってもらうその後に俺が乗り込む。

そして助手席に奏、後部座席に俺とリサという順番で座った。

「おい！！ 亮！！ うるさい！！ 音量下げろ！！」

「ういー！！」

ようやく音量を下げた亮はリサにタバコを吸って良いか聞いて窓を全開にしてからタバコに火を着ける。

亮が吸っているタバコはロスマンスロイヤル。

普通のタバコにくらべて1.5倍くらい長く、細いのだ。

長身で細い（筋肉は付いているが）亮にはぴったりのタバコなんじゃないかと思う。

それにタバコ自体もなんかチャライしね。

そして車が走り出す。

スキール音を立てながら体にGがかかるのを体感できるほどの加速だ。

あまりの加速にリサはびっくりして全身を硬直している。

これはいつもの事なので俺は気にしていなかったのだが初めてのリサにはやっぱりきつかったらしい。

「おい、亮。あんまスピードだすなよ！」

「わりーわりー、スピード落とすわ。」

40kmが法定速度の一般道を100km出す馬鹿がどこに居る……。

あ、ここに居るか。

大きい国道に出てからは車をばんばん煽っては抜いていく亮。

いつもなら俺が怒るのだが、隣のリサを見るとこんな速度はやはり初めてなのかすこし興奮気味に外を見ていた。

その顔を見るとなんだか亮を怒る気力をそがれてそのGを感じながらタバコに火を着けた。

甘ったるい香りの煙が肺を満たすのを感じながら尋常じゃない勢いで流れていく景色を見ていた。

ちゃーらー、へっちゃらー(後書き)

ゼロクラウンは都内を走ってます。

白黒の塗装で赤いお帽子を被ってます。

東京に住んでいる人は覚えておくといいかも？

(警視庁のパトカーです。)

あ、ちなみにタイトルは某芸能人さんのネタから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5912r/>

エルフの嫁さん

2011年11月15日15時42分発行